

「国際理解に関する学習」についての一考察（その2）

—小学校第6学年の「総合的な学習の時間」と「給食の時間」において—

佐伯 英人・中本 優花^{*1}・藤元 涼太^{*2}・Irish Cenal^{*3}・尾上 隆子^{*4}

A Study on 'Learning related to international understanding'(II):
Regarding "the Period for Integrated Studies" and lunchtime in the 6th grade of elementary school

SAIKI Hideto, NAKAMOTO Yuka^{*1}, FUJIMOTO Ryota^{*2}, IRISH Cenal^{*3}, OUE Ryuko^{*4}

(Received August 3, 2023)

キーワード：国際理解、総合的な学習の時間、給食、第6学年、フィリピン

1. 研究の目的

1-1 小学校におけるロシアを対象とした国際理解に関する学習

後藤・上田・山口・佐伯（2020）の「「国際理解に関する学習」についての一考察 - 小学校第5学年の「総合的な学習の時間」において -」では、ロシアを対象として国際理解に関する学習を実践した。児童の意識を調べて分析した結果、明らかになったことは次のA～Cである。

- A ロシアに対する興味の程度（「ロシアについて知りたい」という児童の意識）が、単元を通して常に高く、「良好」であった。
- B ロシアに対する理解の程度（「ロシアについて知っている」という児童の意識）が、「調べ学習」で明瞭に高まり、高まった意識は「授業」を通して維持された（「良好」というまでには至らなかった）。
- C ロシアに対する印象が、単元を通して明瞭に高まった（「良好」というまでには至らなかった）。その他、ロシアに対する印象のうち、「ポジティブな意識」の要因、「ポジティブでもなく、また、ネガティブでもない意識」の要因、「ネガティブな意識」の要因のいくつかがそれぞれ明らかになった。

1-2 山口市立二島小学校の外国語活動・外国語科の授業

山口市立二島小学校では、2022年4月より、筆者の1人のIrish Cenalが、第3学年と第4学年の外国語活動、第5学年と第6学年の外国語科でALT（外国語指導助手）の教員（T2）としてT.T.（Team Teaching）を行い、指導してきた。Irish Cenalの母国はフィリピンである。

2022年度の第6学年A組（児童数：12名）の外国語科のT1は筆者の1人の藤元涼太である。つまり、2022年度の第6学年の外国語科は両者がT.T.を行い、指導している。別の言い方をすると、Irish Cenalは第6学年の外国語科においてT2として英語の学習の補助をしているといえる。そのため、これまで外国語科の授業中、母国のフィリピンについて児童に話す機会は無かった（Irish Cenalの母国がフィリピンであることは2022年4月に児童に話している）。

1-3 研究の目的

前述したように、後藤・上田・山口・佐伯（2020）では、小学校においてロシアを対象として国際理解に関する学習を実践して知見を得た。しかし、その他の国や地域を対象として国際理解に関する学習を行い、児童の意識を精緻に調べて分析し、議論することはできていなかった。

*1 防府市立華城小学校 *2 ドクターキューブ株式会社（前 山口市立二島小学校） *3 株式会社アウルズ
*4 山口市立二島小学校

そこで、本研究では「総合的な学習の時間」でフィリピンを対象とした授業を実践した。実践は山口市立二島小学校の第6学年A組で行った。なお、この授業では藤元涼太がT1、Irish CenalがT2である。

また、フィリピンで日常的に食べられている食事を児童が食べるといった経験はこれまでに無く、食事に関する知見も得られていなかった。そこで、本研究では、フィリピンで日常的に食べられている食事を給食で提供した。なお、給食の献立は、筆者の1人の栄養教諭の尾上隆子がIrish Cenalの協力を得て作成した。

本研究の目的は、児童の意識を調査・分析し、フィリピンを対象とした授業及び給食（フィリピンの食事）について知見を得ることである。

ちなみに、フィリピンを対象とした授業及び給食の時間においてIrish Cenalの役目はALT（外国語指導助手）ではないが、本稿では、Irish Cenalを便宜的に「ALTの教員（T2）」もしくは「アイリッシュ先生」と以下に称する。

2. 授業

2-1 単元の展開

本研究の学習活動と調査（学習の内容、調査の内容、実施した日時）を表1に示す。学習活動は2つの授業であり、「調べ学習をする授業」と「ALTの教員（T2）と交流する授業」である。「調べ学習をする授業」は2022年11月11日の1・2校時に実施し、「ALTの教員（T2）と交流する授業」は2022年11月15日の1・2校時に実施した。学習活動について詳しくは「2-2 『調べ学習をする授業』について」と「2-3 『ALTの教員（T2）と交流する授業』について」で後述する。なお、本研究では「調べ学習をする授業」と「ALTの教員（T2）と交流する授業」を1つの単元とした。

調査は「調べ学習をする授業」の開始前時と終了時、「ALTの教員（T2）と交流する授業」の開始前時と終了時の4時点で実施し、児童の意識について調査した。1回目の調査は2022年11月11日の1校時開始前時、2回目の調査は11月11日の2校時終了時、3回目の調査は11月15日の1校時開始前時、4回目の調査は11月15日の2校時終了時に行った。本稿では1回目の調査を調査①、2回目の調査を調査②、3回目の調査を調査③、4回目の調査を調査④と称する。調査の内容について詳しくは「4-1 授業について」で後述する。

なお、本単元で実施した2つの授業（「調べ学習をする授業」と「ALTの教員（T2）と交流する授業」）を受けた児童数は10名であった。

表1 学習活動と調査

学習活動と調査	学習の内容、調査の内容	実施した日時
調査①	児童の意識を調査する。	11月11日の1校時開始前時
調べ学習をする授業	児童一人ひとりがタブレットPCを使って（Webサイトを検索して）、フィリピンに関することを調べる。	11月11日の1・2校時
調査②	児童の意識を調査する。	11月11日の2校時終了時
調査③	児童の意識を調査する。	11月15日の1校時開始前時
ALTの教員（T2）と交流する授業	調べたことをもとにALTの教員（T2）に質問したり、ALTの教員（T2）の説明を聞いて質問したりして話し合う。	11月15日の1・2校時
調査④	児童の意識を調査する。	11月15日の2校時終了時

2-2 「調べ学習をする授業」について

「調べ学習をする授業」の開始前時に「アイリッシュ先生から6年A組へのメッセージ」として「Hello！ How are you？ We have a class in 11/15. I will tell you about my county, Philippines. So, please research about Philippines.」を伝え、今後の授業の日程（授業を実施する日時）と主な学習の内容（11月11日の1・2校時に「調べ学習をする授業」を実施し、11月15日の1・2校時に「ALTの教員（T2）と交流する授業」を実施すること）を伝えた。その後、11月11日の1校時の開始前時に調査①を行った。

11月11日の1・2校時に「調べ学習をする授業」を実施した。この「調べ学習をする授業」では、児童一人ひとりにタブレットPCを使わせて（Webサイトを検索させて）、フィリピンに関することを調べさせた。このとき、「フィリピンについて調べよう！」と題したワークシートを配付した（図1）。ワークシートには「①調べたい内容（調べたい理由）、②調べてわかったこと、③調べて気づいたこと・思ったこと、④アイリッシュ先生に質問してみたいこと」の記述欄を設定した。

ちなみに、後藤・上田・山口・佐伯（2020）では「調べ学習」の期間を設定し、家庭学習（自主学習）をさせた。本研究では、家庭学習（自主学習）ではなく、授業中に「調べ学習」をさせた。この点が相違点である。11月11日の2校時終了時に調査②を行った。

図1 児童に配付したワークシート

2-3 「ALTの教員（T2）と交流する授業」について

2-3-1 「ALTの教員（T2）と交流する授業」の展開

11月15日の1校時の開始前時に調査③を行った。11月15日の1・2校時に「ALTの教員（T2）と交流する授業」を実施した。授業の展開を表2に示す。授業中、藤元涼太（T1）が授業をコーディネートし、ALTの教員（T2）が質疑応答、プレゼンテーションを行った。このとき、市原恒氏（株式会社アウルズ教育事業部BOE課コーディネーター）が適宜、通訳をした。11月15日の2校時終了時に調査④を行った。

表2 授業の展開

学習活動	学習内容
①	ALTの教員（T2）と児童の質疑応答
②	ALTの教員（T2）によるプレゼンテーション
③	ALTの教員（T2）と児童の質疑応答

2-3-2 学習活動①

学習活動①では「調べ学習」をもとに児童に質問をさせ、ALTの教員（T2）が質問に回答した。学習活動①におけるALTの教員（T2）と児童の質疑応答の一部を抽出して表3に示す。なお、表3における児童の番号は表内の児童を識別するために付けており、他表の児童の番号とは関連していない。学習活動①のようすを図2に示す。

表3 学習活動①におけるALTの教員(T2)と児童の質疑応答(一部)

<p>C1 : (挙手) T1 : 「C1 さん。」 C1 : 「えっと、フィリピンは島が多いから、島ごとに言葉がちがって 172 種類くらいの言語があることが分かりました。本当ですか？」 Terp : 「There are many islands in your country, right? So, each island has their own language. Is it About 172 languages?」 ALT : 「Yes. Different languages. That's right. Okay.」 Terp : 「はい。違う言語です。そのとおりです。」 C2 : (挙手) T1 : 「C2 さん。」 C2 : 「学校についてで、フィリピンの義務教育は幼稚園が1年、小学校が6年、そして高校が6年、合計で13年、日本より義務教育が4年長い。高校が6年で中学校はないけれど、最初の4年がジュニアハイスクールとよばれているので、日本でいう中学校と思います。フィリピンの義務教育は13年ですか？」 Terp : 「How about education? So, in Japan it is 9 years, the government will pay for the education. In your country, Is it about 13 years?」 ALT : 「13, years.」 Terp : 「はい。13年です。」</p>

C1・C2 : 児童, T1 : 藤元, ALT : ALTの教員(T2), Terp : 通訳者, () : 行動

2-3-3 学習活動②

学習活動②ではALTの教員(T2)が、フィリピンに関することについてスライドを用いてプレゼンテーションを行った。学習活動②のようすを図3と図4に示す。児童に説明した内容を以下に示す。

スライド①「日本とフィリピンの位置を示した地図」を提示し、日本からフィリピンの間を飛行機で移動すると約5時間かかることを説明した。スライド②「フィリピンの地図とフィリピンの国旗」を提示し、国旗の由来について、また、フィリピンにはルソン地方、ビサヤ地方、ミンダナオ地方という3つの地域があり、7641の島があること、人口は約1億1200万人であることを説明した。加えてALTの教員(T2)の出身地がミンダナオ島のダバオ市であることを伝えた。スライド③「アポ山の写真」を提示し、フィリピンで一番高い山であることを説明した。スライド④「フィリピンワシの写真」を提示し、フィリピンに生息している大型のワシであり、サルなどを食べること、飛んでいる姿を時々、見かけることを説明した。スライド⑤「地域の使用言語を示したフィリピンの地図」を提示し、フィリピンの公用語はタガログ語(フィリピン語)と英語であること、フィリピンには、地域で使われる言語としてタガログ語、イロカノ語、ビコール語、セブアノ語、イロンゴ語、ワライ語などがあり、180以上の言語があることを説明した。加えてALTの教員(T2)の出身地がミンダナオ島のダバオ市なのでセブアノ語を使うこと、その他、スペイン語やイスラム語を使う場合があることを伝えた。スライド⑥「屋台の写真」と⑦「屋台で売られている食べ物の写真」を提示し、フィリピンでは食べ物を売る屋台が多く、レチョン(豚の丸焼き)、アドボ(肉や野菜を煮込んだ料理)、ハロハロ(かき氷の上に果物やアイスクリームなどを入れたデザート)、バロット(孵化直前のアヒルの卵を使って作るゆで卵)などが売られていることを説明した。スライド⑧「4つの果物の写真」を提示し、フィリピンではドリアン、マンゴスチン、マンゴー、パパイヤといった果物が栽培されていることを説明した。スライド⑨「ジプニーの写真」を提示し、フィリピンの交通機関は乗合バスであり、ジプニーということを説明した。⑩「宗教を示した円グラフ」を提示し、フィリピンで信仰されている宗教は主にキリスト教であり、教派はローマ・カトリック教会が約83%、その他のキリスト教が約10%であることを説明した。⑪「都市と田舎の住居とバハイクボの写真」を提示し、都市部のマンション、アパート、一戸建ての家のようす、田舎の一戸建ての家のようすを見せた。また、フィリピンにはバハイクボという伝統的な竹製の屋根をヤシの葉で作った高床式の家があることを説明した。⑫「バハイクボを村の人たちが持ち上げて移動している写真」を提示し、このようなフィリピン社会でみられる助け合いをバヤニハンということを説明した。⑬「制服を着た子どもたちの写真」を提示し、フィリピンでは学校ごとに制服が違うことを説明した。⑭「フィリピンの子どもたちが登校している写真」を提示し、フィリピンでは子どもと保護者がいっしょに登下校することを説明した。⑮「子どもたちの弁当と売店に並んでいる子どもたちの写真」を提示し、フィリピンでは昼食

に弁当を持参する、もしくは、売店で購入することを説明した。⑩「チョコレートヒルズとバナウェ・ライステラスの写真」を提示し、フィリピンの観光地であり、美しい景色が見られることを説明した。⑪「パラワン島とボラカイ島の写真」を提示し、を提示し、フィリピンの観光地であり、さまざまな海の生き物と出会えることを説明した。⑫「マノボをしている写真」を提示し、マノボとは年上の人に対して敬意を示すフィリピンの挨拶であり、年上の人にとって、その手の甲を自分の額に当てることを説明した。⑬「ハラナをしている写真」を提示し、ハラナとはフィリピンの伝統的な告白の方法であり、男性が女性に対してギターを弾いてラブソングを歌うことを説明した。⑭「バロトサヤを着ている女性の写真」を提示し、バロトサヤとはフィリピンの女性の民族衣装であり、日本の着物に該当することを説明した。⑮「アーニス、パロセボ、プックポック・パラヨーク (Pukpok Palayok)、カダンカダンをしている写真」を提示し、これらはフィリピンの伝統的な武術や遊びであり、アーニスとは棒を使った武術であること、パロセボとは油を塗った棒をのぼって旗をとることを競う遊び、プックポック・パラヨークとは目隠しをして棒でパラヨークを叩く遊びであり、日本のスイカ割りと似ていること、カダンカダンとは日本でいう竹馬であることを説明した。⑯「諸聖人の日と死者の日のようすの写真」を提示し、日本でいうお盆であり、8月ではなく、フィリピンでは11月に墓地や教会に行き、食べ物を食べてパーティーをすることを伝えた。⑰「バレンタインの日のようすの写真」を提示し、日本ではバレンタインの日は恋人のためにあるけれど、フィリピンではすべての人のためにあるため、友達や家族などに花をあげたり、チョコレートをあげたりすることを説明した。⑱「クリスマスの日のようすの写真」を提示し、フィリピンのクリスマスは12月から1月にかけてあり、長い休みになり、その間に元日があること、クリスマスの準備は9月からすることを説明した。

2-3-4 学習活動③

学習活動③では、学習活動②「ALTの教員(T2)によるプレゼンテーション」をもとに児童に質問をさせ、ALTの教員(T2)が質問に回答した。学習活動③におけるALTの教員(T2)と児童の質疑応答の一部を抽出して表4に示す。なお、表4における児童の番号は表内の児童を識別するために付けており、他表の児童の番号とは関連していない。学習活動③のようすを図5に示す。

表4 学習活動③におけるALTの教員(T2)と児童の質疑応答(一部)

<p>C1 : (挙手) T1 : 「C1 さん。」 C1 : 「クリスマスの日に何を食べますか？」 Terp : 「What food do you eat on Christmas Day?」 ALT : 「Christmas. Sweets, Chocolate, and Meats. Fried chicken, Fruits, and Cakes.」 Terp : 「クリスマスには、お菓子やチョコレート、お肉、フライドチキン、フルーツ、ケーキを食べます。」 C2 : (挙手) T1 : 「C2 さん。」 C2 : 「学校は何時から始まりましたか。」 Terp : 「When the elementary school start in your country?」 ALT : 「In my country, school starts at 7 a.m.」 Terp : 「私の国では学校は7時に始まりました。」 C : 「7時！」 ALT : 「So, we have to be in school at 6 a.m.」 Terp : 「だから、6時には学校に居なければなりませんでした。」 C : 「6時！」 ALT : 「Because we have to clean.」(箒を使って掃くしぐさをする) Terp : 「そう、6時から、掃除をして…」 C : 「6時から掃除！」 ALT : 「Finish at 4 p.m.」 Terp : 「そして4時に終わりました。」 C : 「えっ！早い！」 ALT : 「And 4 p.m. we have to clean again.」 Terp : 「そして4時に掃除をまたしなければいけません。」 C : 「掃除して帰る。えー！すごい！」</p>

C1・C2 : 児童, C : 複数の児童, T1 : 藤元, ALT : ALTの教員(T2), Terp : 通訳者, () : 行動



図2 学習活動①

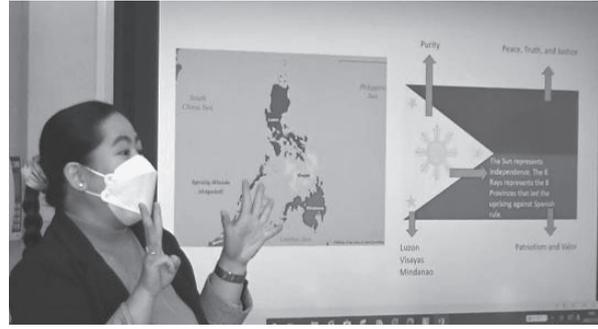


図3 学習活動②



図4 学習活動②



図5 学習活動③

3. 給食の時間

フィリピンの給食の献立は、①タイ米のご飯、②アドボ、③マカロニサラダ、④エッグスープ ⑤マンゴープリンと牛乳である。この献立の給食は2022年12月20日に提供した。提供したフィリピンの給食を図6に示す。給食の時間の始めにALTの教員(T2)が説明を行った。説明の内容は画面上に日本語で表示した(図7)。その後、児童は給食を食べた。児童が給食を食べているようすを図8に示す。

調査は給食の時間の終了時に実施した。調査の内容について詳しくは「4-2 給食について」で後述する。なお、給食を食べた児童数は11名であった。



図6 フィリピンの給食

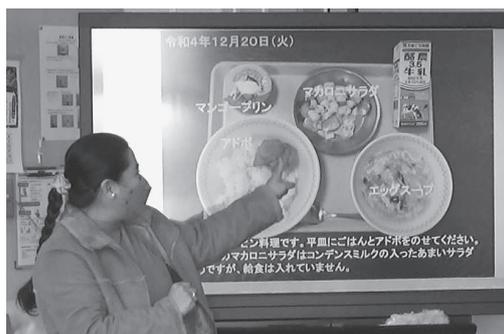


図7 ALTの教員(T2)が説明しているようす



図8 給食を食べているようす

4. 調査方法と分析方法

4-1 授業について

前述したように授業について児童の意識を4時点（調査①～調査④）で調査した（表1）。調査方法には質問紙法を用いた。質問紙では「問1」～「問3」を設定した。なお、調査方法は後藤・上田・山口・佐伯（2020）に従った。「問1」では「フィリピンに対するあなたの興味の程度を教えてください。あてはまる番号に一つ○をつけてください。」という教示を行い、質問項目A「フィリピンについて知りたい」を設定し、5件法で回答を求めた。「問2」では「フィリピンに対するあなたの理解の程度を教えてください。あてはまる番号に一つ○をつけてください。」という教示を行い、質問項目B「フィリピンについて知っている」を設定し、5件法で回答を求めた。「問3」では「フィリピンに対するあなたの印象を教えてください。あてはまる番号に一つ○をつけてください。また、そのように答えた理由を記述欄に書いてください。」という教示を行い、質問項目C「良好（フィリピンに対する印象）」を設定し、5件法と自由記述で回答を求めた。「問1」～「問3」の5件法は「5：とても当てはまる、4：だいたい当てはまる、3：どちらともいえない、2：あまり当てはまらない、1：まったく当てはまらない」とした。この他、質問紙では「問1」～「問3」の他、出席番号を記入させた。

「問1」～「問3」の選択技法による調査を分析するにあたり、まず、5件法の「5：とても当てはまる」を5点、「4：だいたい当てはまる」を4点、「3：どちらともいえない」を3点、「2：あまり当てはまらない」を2点、「1：まったく当てはまらない」を1点とした。次に、上記の得点を用いて平均値と標準偏差を算出し、天井効果の有無、床効果の有無を確認した。「問1」～「問3」で設定した質問項目（質問項目A「フィリピンについて知りたい」、質問項目B「フィリピンについて知っている」、質問項目C「良好（フィリピンに対する印象）」）は、得点の値が高いほど良好な状況を示している。そのため、天井効果がみられた場合、児童の意識は「良好」と判断し、床効果がみられた場合、児童の意識は「不良」と判断した。また、天井効果がみられず、かつ、床効果がみられなかった場合、平均値が4点以上で、児童の意識は「概ね良好」と判断し、平均値が2点以下で、児童の意識は「概ね不良」と判断し、それ以外の平均値の場合（2点より大きく、4点より小さい場合）、児童の意識は「概ね良好でもなく、概ね不良でもない」と判断した。

「問3」の記述法による調査を分析するにあたり、まず、「問3」の選択技法による調査の得点を用いて、得点ごとに人数を集計し、また、各調査間（調査①と調査②、調査②と調査③、調査③と調査④）における得点の変化の仕方をもとに人数を集計した。次に、この集計の結果をもとに、調査①と調査②（学習活動①の前後）、調査③と調査④（学習活動②の前後）において得点の変化がみられた児童の記述を抽出した。その記述を読み、そのように答えた理由（児童の意識の要因）を見取り、記述の内容を比較し、児童の意識が変容した理由について検討した。

4-2 給食について

前述したように給食について児童の意識を1時点（給食の時間の終了時）で調査した。調査方法には質問紙法を用いた。質問紙では「問い」を設定した。「問い」では「フィリピンの給食に対するあなたの感想を教えてください。あてはまる番号に一つ○をつけてください。」という教示を行い、フィリピンの給食の献立ごと（①タイ米のご飯、②アドボ、③マカロニサラダ、④エッグスープ、⑤マンゴープリン）に質問項目D「おいしかった」を設定し、5件法で回答を求めた。「問い」の5件法は「5：とても当てはまる、4：だいたい当てはまる、3：どちらともいえない、2：あまり当てはまらない、1：まったく当てはまらない」とした。分析方法は「4-1 授業について」の「問1」～「問3」の選択技法による調査の分析方法と同じである。

5. 結果と考察

5-1 授業について

5-1-1 選択技法の調査について

「問1」～「問3」の選択技法の調査について、平均値と標準偏差を算出し、天井効果の有無、床効果の有無を確認した。その結果を表5に示す。有効回答数は10名であった。「問1」の質問項目A「フィリピン

について知りたい」において、表5をみると調査①～調査④のすべてにおいて天井効果がみられた。このことは、児童の意識が、単元を通して「良好」であったことを示している。「問2」の質問項目B「フィリピンについて知っている」において、表5をみると調査①～調査③では天井効果がみられなかった。調査①の平均値をみると2.60であった。このことは、調査①の児童の意識は「概ね良好でもなく、概ね不良でもない」であったことを示している。調査②の平均値は4.30であり、調査③の平均値は4.10であった。このことは、調査②、調査③の児童の意識が「概ね良好」であったことを示している。調査④では天井効果がみられた。このことは、児童の意識が「良好」であったことを示している。上記のことは、児童の意識が単元の開始前時に「概ね良好でもなく、概ね不良でもない」であったが、単元の終了時に「良好」であったことを示している。別の言い方をすると、児童の意識が、単元を通して「概ね良好でもなく、概ね不良でもない」から「良好」に変容したといえる。「問3」の質問項目C「良好（フィリピンに対する印象）」において、表5をみると調査①～調査③では天井効果がみられなかった。調査①の平均値をみると3.30であった。このことは、調査①の児童の意識は「概ね良好でもなく、概ね不良でもない」であったことを示している。調査②の平均値は4.00であり、調査③の平均値は4.10であった。このことは、調査②、調査③の児童の意識が「概ね良好」であったことを示している。調査④では天井効果がみられた。このことは、児童の意識が「良好」であったことを示している。上記のことは、児童の意識が単元の開始前時に「概ね良好でもなく、概ね不良でもない」であったが、単元の終了時に「良好」であったことを示している。別の言い方をすると、児童の意識が、単元を通して「概ね良好でもなく、概ね不良でもない」から「良好」に変容したといえる。

表5 質問項目の平均値、標準偏差、天井効果と床効果の有無

記号	質問項目	分析内容	調査			
			①	②	③	④
A	フィリピンについて知りたい	平均値	4.40	4.50	4.40	4.60
		標準偏差	0.52	0.53	0.52	0.52
		天井効果	●	●	●	●
		床効果	-	-	-	-
B	フィリピンについて知っている	平均値	2.60	4.30	4.10	4.70
		標準偏差	1.00	0.68	0.88	0.48
		天井効果	-	-	-	●
		床効果	-	-	-	-
C	良好（フィリピンに対する印象）	平均値	3.30	4.00	4.10	4.50
		標準偏差	0.68	0.94	0.74	0.71
		天井効果	-	-	-	●
		床効果	-	-	-	-

n=10, min=1, max=5

有り：●，無し：-

5-1-2 記述法の調査について

「問3」の選択枝法による調査の得点を用いて、得点ごとに人数を集計し、また、各調査間（調査①と調査②、調査②と調査③、調査③と調査④）における得点の変化の仕方をもとに人数を集計した。その結果を図9に示す。なお、調査を通して1点に該当する選択枝を選択した児童はみられなかったため、図9に1点を表記していない。

図9の集計の結果をもとに、調査①と調査②（学習活動①の前後）において得点の変化がみられた児童の記述を抽出した。その結果、学習活動①の前後にあたる調査①と調査②の間に選択枝を変更した児童は7名であった。その中の6名は正の方向に変更し（2点→4点：1名、3点→4点：2名、3点→5点：1名、4点→5点：2名）、1名は負の方向に変更した（3点→2点：1名）。この7名の児童のうち、調査①と調査②の両方に、もしくは、いずれかに記述がみられた児童は4名であった。この4名の記述を表6に示す。なお、表6における児童の番号は表内の児童を識別するために付けており、他表の児童の番号とは関連していない。正の方向に変更した児童の記述をみると、C1が調査①では「未記入」、調査②では「調べてみると、とても良い所だなと思ったから」であった。C2が調査①では「良い国だと思っているから」、調査②では「日本と似ている所があったから」であった。C3が調査①では「産業が発展している印象がある」、調査②では「農林水産業やサービス業が盛んだから」であった。負の方向に変更した児童の記述をみると、C4が調査①

では「あまり考えたことがないから」であり、調査②では「貧しい生活をしている人が多そうだったから」であった。

図9の集計の結果をもとに、調査③と調査④（学習活動②の前後）において得点の変化がみられた児童の記述を抽出した。その結果、学習活動②の前後にあたる調査③と調査④の間に選択肢を変更した児童は3名であった。その中のすべての児童が正の方向に変更した（3点→5点：1名、4点→5点：2名）。この3名の児童のうち、調査③と調査④の両方に、もしくは、いずれかに記述がみられた児童は2名であった。この2名の記述を表6に示す。なお、表6における児童の番号は表内の児童を識別するために付けており、他表の児童の番号とは関連していない。正の方向に変更した児童の記述をみると、C5が調査③では「未記入」、調査④では「島がいっぱいあって面白そうだから」と「好きな生き物がいっぱいいるから」であった。C6が調査③では「にぎやかで楽しそうだから」、調査④では「食べ物もおいしそうだし、楽しそうだから」であった。

上記の児童の調査①と調査②、調査③と調査④の記述の内容を比較してみると、理解が深まったことにより、正の方向、もしくは、負の方向に印象が変化することをうかがい知ることができる。別の言い方をすると、児童の印象が変化した要因の1つとして「理解が深まったこと」が見出されたといえる。

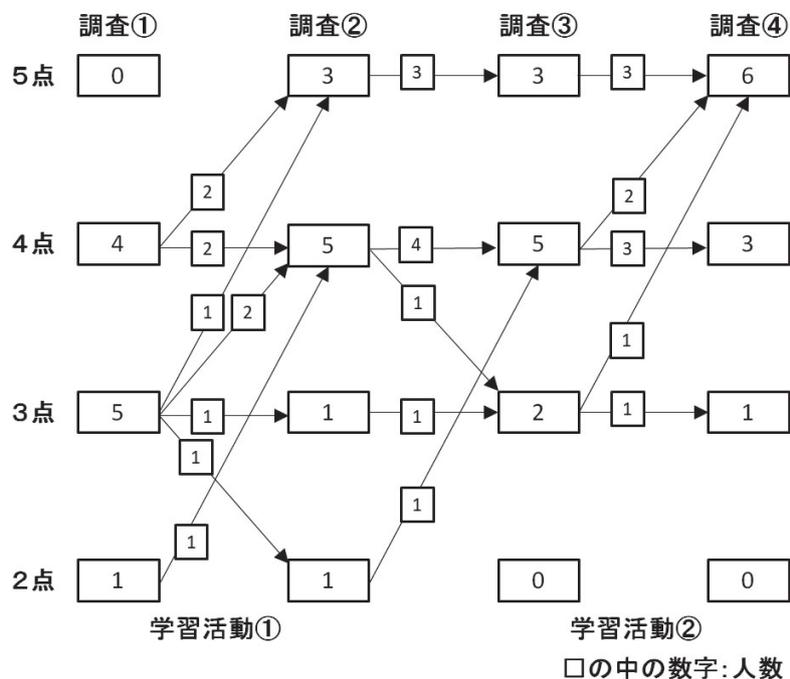


図9 質問項目C「良好（フィリピンに対する印象）」の人数

表6 調査①と調査②の間、調査③と調査④の間に選択肢を変更した児童の記述

調査間	児童	調査	選択肢	〈そのように答えた理由〉の記述
調査① と 調査②	C1	①	4	-
		②	5	調べてみると、とても良い所だと思ったから
	C2	①	4	良い国だと思っているから。
		②	5	日本と似ている所があったから
	C3	①	3	産業が発展している印象がある
		②	5	農林水産業やサービス業が盛んだから
C4	①	3	あまり考えたことがないから	
	②	2	貧しい生活をしている人が多そうだったから	
調査③ と 調査④	C5	③	3	-
		④	5	島がいっぱいあって面白そうだから 好きな生き物がいっぱいいるから
	C6	③	4	にぎやかで楽しそうだから
		④	5	食べ物もおいしそうだし、楽しそうだから

C1～C6：児童

-：未記入

5-2 給食について

「問い」の選択肢法の調査について、平均値と標準偏差を算出し、天井効果の有無、床効果の有無を確認した。その結果を表7に示す。有効回答数は11名であった。「問い」の質問項目D「おいしかった」において、表7をみるとフィリピンの給食の献立ごと（①タイ米のご飯，②アドボ，③マカロニサラダ，④エッグスープ，⑤マンゴープリン）に天井効果がみられた。このことは、フィリピンの給食を食べた児童の意識（「おいしかった」という児童の意識）が「良好」であったことを示している。

表7 質問項目D「おいしかった」の平均値、標準偏差、天井効果と床効果の有無

番号	献立	分析内容			
		平均値	標準偏差	天井効果	床効果
①	タイ米のご飯	4.82	0.41	●	-
②	アドボ	5.00	0.00	●	-
③	マカロニサラダ	4.91	0.30	●	-
④	エッグスープ	4.91	0.30	●	-
⑤	マンゴープリン	4.82	0.60	●	-

n=11, min=1, max=5

有り：●，無し：-

おわりに

本研究では「総合的な学習の時間」でフィリピンを対象とした授業を実践し、また、フィリピンで日常的に食べられている食事を給食として提供した。児童の意識を調べて分析した結果、明らかになったことは次のA～Dである。

- A フィリピンに対する興味の程度（「フィリピンについて知りたい」という児童の意識）は、単元を通して「良好」であった。
- B フィリピンに対する理解の程度（「フィリピンについて知っている」という児童の意識）は、単元を通して「概ね良好でもなく、概ね不良でもない」から「良好」に変容した。
- C フィリピンに対する印象は、単元を通して「概ね良好でもなく、概ね不良でもない」から「良好」に変容した。また、児童の印象が変化した要因の1つとして「理解が深まったこと」が見出された。
- D フィリピンの給食を食べた児童の意識（「おいしかった」という児童の意識）は「良好」であった。

今後の課題

本研究では、フィリピンを対象として実践研究を行い、知見を得た。今後、フィリピン以外の国や地域を対象として実践研究を行い、知見を得る必要がある。

謝辞

本研究を実践するにあたり、ご協力いただきました山口市立二島小学校校長の廣繁和明氏、株式会社アウルズ教育事業部 BOE 課コーディネーターの市原恒氏に感謝の意を表します。

参考文献

後藤大雄・上田エカテリーナ・山口彩花・佐伯英人（2020）：「『国際理解に関する学習』についての一考察 - 小学校第5学年の「総合的な学習の時間」において -」，『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』，第50号，pp.181-190.